文化

なら民俗通信　296

勺　禰子

疫病と与謝野晶子

社会の矛盾を敏感に

▼スペイン風邪流行時の晶子

今からおよそ百年前、歌人の与謝野晶子は、スペイン風邪についていくつかの文章を残している。公衆衛生学者や歴史学者が引用した、「感冒の床から」（1918年11月10日）や「死の恐怖」（1920年1月20日、ともに横浜貿易新報」初出）が、今春新聞やテレビでも、たびたび紹介された。

「感冒の床から」では、「風邪までが交通機関の発達に伴（つ）れて世界的」になり、「この風邪の伝染性の急激なのには実に驚かれ」るにもかかわらず、「政府はなぜ（略）多くの人間の密集する場所の一時的休業を命じなかつた」のかと、「盗人を見てから縄を綯ふと云ふやうな日本人の便宜主義」を糾弾し、「社会的施設に統一と徹底との欠けて居る為に、国民はどんなに多くの避けらるべき、禍（わざはひ）を避けずに居るか知れません」と訴えた。

3年に渡り流行し、日本で約45万人が亡くなったといわれるスペイン風邪が初上陸した1918年秋、晶子は40歳を迎えようとしていた。前年秋には産んだばかりの男児、寸（そん）をしくし、平塚らいてう等と有名な「母性保護論争」の真っ最中だった。

改めて当時の評論を当たってみると、晶子は他にもスペイン風邪に関したことをたびたび書いている。

末娘藤子の出産を翌月に控えた臨月の晶子が、1919年2月12日付で発表した「折折の感想」（『激動の中を行く』所収）には、歌論、教育論、いまだ続く母性保護論争の平塚らいてうへの返答に交じり、「世界風邪がまた盛り返し、私達夫婦も去年から二度それに罹（かか）り、子供もつぎつぎに罹って、現に今も二人の男の児が寝てゐます。かう云ふ流行病のあるたびに、私は都市の衛生設備の不完全を悲しみます。此頃の電車の過度な満員などは人間を詰込んで病毒を強制的に伝染させる箱のやうな感じがします。あの汚れた吊り革などがいつ消毒されることか考へてもぞつとします」と、まるで2020年の日本のことかと思うような状況が描かれている。

▼暮らしから生まれる評論

17年間で12人の子を産み、経済的役割を担うため雑誌や新聞に多くの連載を抱え、絶え間なく社会的発信をすることは、歌人としての晶子の創作時間を奪ったであろう。

長男の光は、母晶子がよく、「私はあきらめてる」と言っていたと回想している。光はまた、晶子の評論活動について、「母は法学者でも経済学者でもないから、一人の婦人として見た経済観であり、社会観、政治観だから、一つの参考にはなるだろうけど、何も一世をリードするような論文であるはずない」と言うが（以上、与謝野光『晶子と寛の思い出』1991年）、だからこそ、暮らしから生まれる実感が、無駄のない言葉で表現される晶子の評論は、今読み返しても何にもおもねらない直球の小気味よさがある。

先述の「母性保護論争」にしても、単に女性からの目線でのみ訴えるのではなく、「寧ろ父性を保護せよ」と社会構造そのものの矛盾を喝破した晶子。一人孤独に全てを担う「ワンオペ育児」が一層深刻化する現代こそ読み返す価値がある。

それにしても晶子はなぜ、常に男女平等、教育と創造の重要性を説き、腐敗した政治や不合理な言動、不条理な社会に敏感であり続け、的確な分析と自分の言葉を持って世に発信し続けることができたのだろうか。

▼言葉、暮らし、いのち

近代以降、短歌は美しいものだけを詠む詩型ではなくなった。美しいものを詠むためであっても、対象を深く見て、自分の言葉でそれを詠まなければ、歌はたちまち形骸化する。晶子も晩年まで、歌の作者は言葉の味わいとその用い方とに、特に潔癖であり敏感でなければならないと説いた。

「廃物利用を評す」（『心頭雑草』1919年）では、当時婦人雑誌で推奨されていた、糸くずを集めて布に織ったり、古葉書で細工物を作ることに、異議申し立てをしている。

浪費が悪徳であることは言うまでもない。しかし「廃物利用」が本当に実用的なものか、「転用のための転用という遊戯」になっていないかと問い、浪費には経済の浪費と時間の浪費とがあり、それは各人の社会的役割の中で冷静に比較して選ぶべきだと持論を展開する。

さらに、「先づ『廃物利用』と云ふ言葉からして矛盾して居ると思ひます。利用し得る限りは決して廃物で無い」というあたりに、私は歌人としての晶子の面目躍如をみる。

歌人は、言葉遣いに関するさまざまな違和感に限りなくこだわる生き物だ。もし、そんなことはどうでもいい、細かすぎるということになれば、歌の推敲なぞ世の中にとって何の役にも立たず、「敗退」を「転戦」といい、「全滅」を「玉砕」と言ったところで、違和感を持たない人間だらけになってしまう恐れもある。

言葉に敏感であることは、言葉を日々使う社会に敏感であることだ。社会に敏感であることは、社会の中で営まれる暮らしに敏感であることだ。暮らしに敏感であることは、命に敏感であることだ。つまり、言葉は、直接的に命に係わる。それをないがしろにする人や社会に気をつけろ。百年前の晶子の発信をしっかりと受け止め、決して無駄にしてはならない。

（しゃく・ねこ＝歌人）

＝次回は6月5日付＝

与謝野晶子評論集『激動の中を行く』＝1919（大正8）年8月刊